

「スピードに恋した男」

# 最狂最速、そして旅人

道を走る者たちへ

A Riders Odyssey 2010



海に囲まれた島国、四国。ここに日本地図を紙めきって全国を駆けずりまわる距離感のない男がいる。彼は仕事をこなし、家庭人としてのおだやかな顔を持ちつつも、それがゆえの限られた時間の中でライフワークとしてのバイク旅をこなすため、狂喜ともいえるスピードの世界へ身を投じる。そこで得たモノ、それは一向に終わりの見えてこない人の連鎖。

大神 龍=文  
text by Ryu Ogami  
松本和男=写真  
photo by Kazuo Matsumoto



急ぐ旅ではないが遅れをとるのは悔しい。走った先に待っているのは、人。



「狂ってる！」彼の走りを目の当たりにした者は口を揃えてそう表現する。その走りは豪快で強烈、大胆にして不敵。しかしそれほどまでに過激でありながら彼はまるでギターリストが弦を弄ぶようにリズムカールにマシンを操る。マシンを構成するパーツというパーツをかき鳴らし、獣のような咆哮と共にあつという間に遠ざかる彼の背中を見せつけられた者は少なくない。その背中には一角獣のエンブレム。

星野俊明、愛媛県在住、年齢39歳、職業は営業マン、そして二児の父親。このプロフィールを見る限りにおいては平均的な普通の中年男性ということになるのだが、身長180cm体重95kgの巨体に黒いレザーを纏い、バイクに跨った途端バイク乗りとしての別の人格が覚醒する。愛機は摩天楼をモチーフにカラーリングされたニンジャ。だがニンジャと言っても外装以外の中身は説明するのが面倒臭くなってしまうほどのんでもないシロモノでもない。そのニンジャが今年のGW明けにオシヤカになつてしまふほどの不運なもろい事故に見舞われた。星野氏も肩甲骨と肋骨を骨折するという重傷を負うこととなる。しかし、そんな大怪我を負いながらも彼は入院することなく自宅療養しながら壊れたニンジャを復活させ、この夏、東北を旅してまわったというのだからそのタフネスぶりはあまりにもハケモノじみていると言えるだろう。ところがその復活したニンジャも旅の帰り道彼の走りに耐え切れず電装系のトラブルに見舞われ名古屋付近でストップ。近くに住んでいる仲間が預けてあったというセカンドバイクであるカタナにスイッチしての帰宅となった。セカンドバイクがカタナ750で、しかも四国に住んでい



ながらそれが名古屋あたりに存在するなど普通ではない。このエピソードひとつとっても彼のバイクライフが常人離れしていることがうかがえるだろう。

そんな理由もあって今回の取材ではマシンがカタナということになったのだが、このカタナも相当にイジリ倒されている。しかし、カスタムされた750カタナも星野氏が跨ると250に見えてしまう。身体もマシンも走りのスケールもすべてにおいて規格外。

そんな星野氏がバイクに乗り始めたのは意外に遅く、二十歳を過ぎてからバイクに興味を抱いたきっかけというのがこれまた意外で、当時つき合っていた彼女がバイクに乗っていた、その影響なんだとか。普通は逆だろう!? とツツコミくなる上に、その猛々しい走りからは想像もつかないようなきつかけではあるが、その後すっかりバイクの世界にはまり込んでしまい、もう抜け出せないところまで来てしまっている。

現在星野氏は四国でチーム「タイトロープ」を率いている。だがメンバーと一緒に走るとは年間を通して数えるほどしかない。大抵の場合、目的地だけ決めてそれ自分が自分のペースで好き好きに走っているのだという。周囲の話も聞かなくても、彼と一緒に走るとはとてつもない労力を要することは想像に難くない。ただし、これはついていくことができたらの話である。

星野氏自身も自分よりも速く走る相手に「それほど多くいるとは思えないのだが、限界を超えてまでついていくことはしない。同様に一緒に走る仲間に対しては無理して自分についてくることをよしとしない。『ついでこの間事故をやったばかりで言うのも何なんですけど、やっぱり事故はダメです。どんなに注意したって